

私立大学研究ブランディング事業

『帝塚山プラットフォーム』の構築による 学際的『奈良学』研究の推進

「奈良県北西部の山・里・川と人々の営みに関する総合的な歴史・文化研究」

プロジェクト

富雄川流域の古道と歴史

帝塚山大学奈良学総合文化研究所

はじめに

本報告書は帝塚山大学の私立大学研究ブランディング事業『『帝塚山プラットフォーム』の構築による 学際的『奈良学』研究の推進』のうち、「奈良県北西部の山・里・川と人々の営みに関する総合的な歴史・文化研究」プロジェクトの一環である。

帝塚山大学奈良学総合文化研究所では、当該事業に関わる研究活動を積極的に推進しているが、鷺森浩幸（所長）が担当して富雄川流域の古道およびその歴史に関する現地踏査を行った。この度、踏査成果を、公表することになった。この踏査は古地図などをもとに富雄川に沿う道路を確認し、現状とつきあわせて把握し、それを通して古道をめぐる人々のさまざまな営みに、改めて光をあてるものである。本学の提起している奈良学とは、このような奈良に関わった多くの人々の姿を、時代を問わず、明らかなしようにするものである。

帝塚山大学奈良学総合文化研究所長 鷺森 浩幸

本踏査について

使用した地図資料

江戸時代の国絵図

江戸時代には、幕府の命で、慶長・正保・元禄・天保の4回にわたりいわゆる国絵図が作成された。このうち元禄国絵図と天保国絵図は国立公文書館HPで公開されている。その解説によると、元禄国絵図は元禄9年(1696)に作成が命じられ、15年(1702)までにほぼすべて完成した。山・川などの自然地形や道路などが描かれ、郡別に色分けされた楕円形の枠内に村名および石高が記される。近代的な地図ではないが、概略的に当時の川・村・道路の位置関係をみるに好都合である。基本的に元禄国絵図によった。

大和全国地図

奥付に「明治一五年四月廿一日 版權免許 同九月十二日 版權買受御届 編輯人 中島鹿平 出版人 阪田一郎」とある。明治15年は1882年。中央に「大和全国地図」のタイトルがあり、山・丘陵、川（青色に着色）などの自然地形と、道、村をはじめとする種々の記載がある。「図中符合」（地図上の記号のこと）として列挙されるのは山陵・御墓・城址・官幣社・諸神社・仏閣・陣屋址・旧都敷地・宮址・山・温泉・諸村・宿駅市町・

郡界・瀑・川・池・道・名勝并小名字・川の名である。村名を楕円で囲んで記す。

二万分の一地形図（陸地測量部）

高山図幅・西大寺図幅

明治41年(1908)測量 明治45年(大正1年 1912)製版・発行

郡山図幅

明治41年(1908)測量 明治45年(大正1年 1912)発行

田原本図幅

明治41年(1908)測量 明治43年(1910)製版・発行

各地図の地名記載

村に関する表記の比較

国絵図	大和全国地図	所属郡	明治地図	1889年町村制	現所属
高山村之内 傍示村		添下郡	傍示	北倭村	生駒市
高山村之内 平尾村		添下郡		北倭村	生駒市
高山村之内 中山村		添下郡	中村	北倭村	生駒市
高山村之内 蒔田村		添下郡	前田	北倭村	生駒市
高山村	高山 (別地点)	添下郡		北倭村	生駒市
上村之内 谷村		添下郡	谷	北倭村	生駒市
上村	上村 (別地点)	添下郡	蛇喰	北倭村	生駒市
上村之内 西村		添下郡	西村	北倭村	生駒市
二名村	二名 (別地点)	添下郡	三松	富雄村	奈良市
二名村之内 東村		添下郡	奥谷	富雄村	奈良市
三碓村	三碓	添下郡	三碓	富雄村	奈良市
三碓村之内 下村		添下郡	土橋・追山	富雄村	奈良市
三碓村之内 黒谷村		添下郡	黒谷	富雄村	奈良市
藤ノ木村之内 砂茶村		添下郡	砂茶屋	富雄村	奈良市
中村之内 藤木村		添下郡	藤木 (別地点)	富雄村	奈良市
中村之内 脇寺村		添下郡	脇寺	富雄村	奈良市

木嶋村	石木	添下郡	木島	富雄村	奈良市
石堂村	石木	添下郡	石堂	富雄村	奈良市
中村	中村	添下郡		富雄村	奈良市
小和田村	大和田	添下郡	大和田	富雄村	奈良市
大向村	大和田	添下郡	大和田	富雄村	奈良市
城村	城村	添下郡	城（西城）	矢田村	大和郡山市
東城村		添下郡	東城	矢田村	大和郡山市
外河村	外川	添下郡	外川	矢田村	大和郡山市
田中村	田中	添下郡	田中	片桐村	大和郡山市
田中村之内 野?村		添下郡		片桐村	大和郡山市
万願寺村	万願寺	添下郡	万願寺	片桐村	大和郡山市
池ノ内村	池ノ内	添下郡	池ノ内	片桐村	大和郡山市
小泉村	小泉	添下郡	小泉	片桐村	大和郡山市
幸前村	幸前	平群郡	幸前	富郷村	斑鳩町
西椎木村		平群郡	西椎木	本多村	大和郡山市
椎木村		平群郡	椎木	本多村	大和郡山市
東福寺村		平群郡	なし	法隆寺村	斑鳩町
高安村	高安	平群郡	高安	富郷村	斑鳩町
阿皮村	阿皮	平群郡	阿皮	富郷村	斑鳩町
西安堵村	西安堵	平群郡	西安堵	安堵村	斑鳩町

阿波村之内 新屋村		平群郡	新家	富郷村	斑鳩町
奥留村	奥留	平群郡	興留	富郷村	斑鳩町
笠目村	笠目	平群郡	笠目	安堵村	斑鳩町
目安村	目安	平群郡	目安	竜田村	斑鳩町

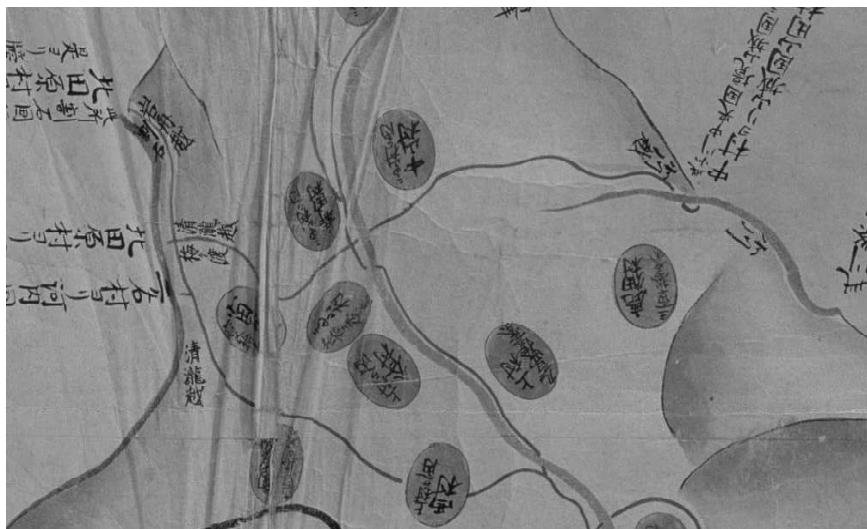
それぞれの地図の地名に関する記載を比較した 配列は北から 同等の場合は西を優先

町村制

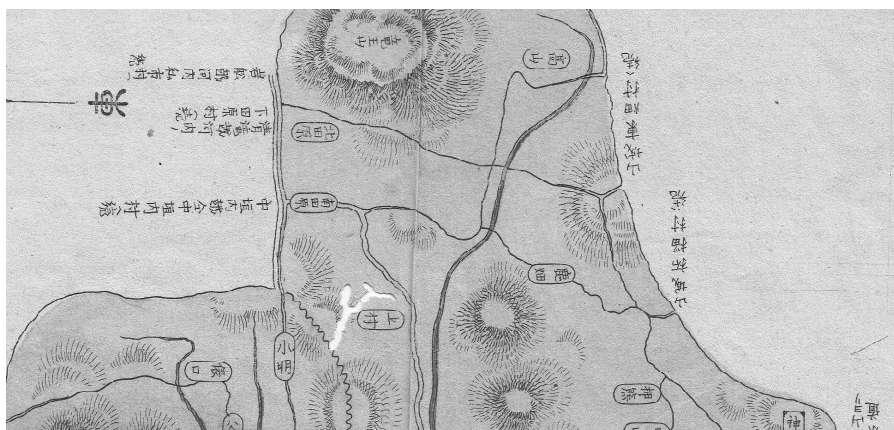
1878年に、いわゆる地方三新法の一つとして郡区町村編制法が制定され、画一的な大区小区制が見直され、以前のあり方に戻った。その後、1888年に市制・町村制、1890年府県制・郡制が制定され、1889年の市制・町村制施行により、奈良県でも町村が発足した。本報告に関連するのは、添下郡北倭村・富雄村・矢田村・片桐村・平群郡富郷村・本多村・法隆寺村・安堵村・竜田村である。1897年、郡制の施行にともない添下郡・平群の二郡は生駒郡となった。

本報告書の執筆および編集は鷲森浩幸が担当し、文責も鷲森にある。

【高山・上町】



元禄村絵図



大和全国地図

1 古道の概要

高山周辺

国絵図の国境部分には文字記載がある。また大和全国図にも簡単な国境の文字記載がある。それらによると、富雄川の北東方向の山城国との境について、次のような記述がある。

《国絵図》

A 北川越

此北川中央国境山城国ニテモ同名

中村ヨリ山城国山田村迄貳里貳拾貳間

B 此川際山ヨリ京海道迄之間山国境不相知（北川の上流 北川越の南方）

《大和全国地図》

A 山城東畑村へ続

B 山城柘榴村へ続

それぞれ同じ境界を指すものらしい。二万分の一図によると、Aの北川越にあたるのは山田荘村東畑から南西に延びる道であろう。国絵図ではこ

の道は北東から南西に延び、ほぼ正しく描かれているようであるが、大和全国図は南東から北西に描かれ、実態と異なっているようである。また、二万分の一図によると、山田荘村柘榴から西行し、鹿畑村の南を通るほぼ東西の道がある。これがBで大和全国図ではほぼ正確に描かれるが、国絵図ではそもそもこの道の記載がない。

A・Bからの道と河内国との国境の状況について。

《国絵図》

C 清滝越 梅ヶ渡

二名村ヨリ河内国下田原村迄一里貳町三拾間

北田原村ヨリ河内国下田原村迄貳町五拾間余

《大和全国図》

C 清滝越河内ノ下田原村へ続

D 中垣内越同中垣内村へ続

Aからのルートが北田原村を通り、清滝越で河内国の下田原村へ通じることとで問題はない。国絵図・大和全国図ともに同じで（C）、二万分の一図でも問題ない。Bからのルートについて、大和全国地図が南田原村を経て中垣内越につながるとする（D）。ただし、二万分の一図では、Bからのルー

トは富雄川を渡し、直線的に西方に延びるが（清滝街道）、大和全国地図では富雄川以西の道の描画はなく、やや南下して南田原へ向かう道が描かれる。この道も二万分の一図にある。現在の生駒市道5号線（かえで通り）がそれに当たるだろう。また、国絵図では、西村から南田原村を通り、清滝越につながる道が描かれる。これにも「清滝越」の注記がある。また大和全国図でも上村からB-Dのルートへつながる道が描かれる。これはいずれも上村のあたりから清滝越への道であるが、多少ルートが異なるようである。二万分の一図では、西村から北に進む道があり、これが比較的大和全国地図のルートと近いようである。

国絵図では、富雄川沿いの道は高山方向から西岸を通して南下し、A-Cルートと交差するところで渡河して東岸に移り、西村あたりまで、道は東岸を進む。大和全国地図ではやはり道は高山から西岸を南下し、A-CルートおよびB-Dルートと交差する。

上町周辺

国絵図では富雄川の東岸を進んだ川沿いの道は西村のあたりで渡河し、西岸に出る。大和全国地図では川沿いの道は高山からそのまま西岸を通る。国絵図は西村のあたりに橋が存在したことを示唆するが、これは長弓寺の参道に架かる橋であろう（現在の名は真弓橋）。橋の東には長弓寺、鳥居

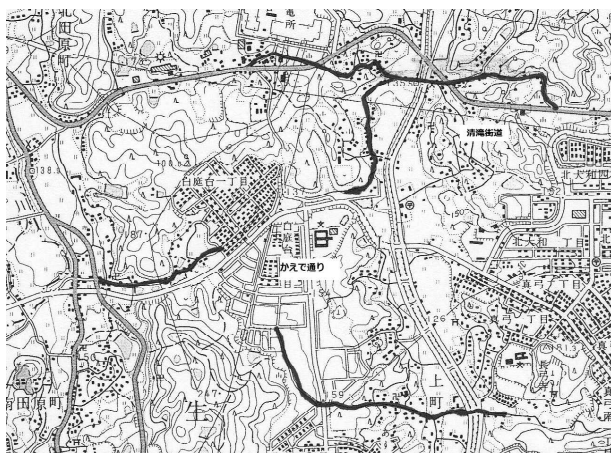
と伊弉諾神社の石柱があり、その東方が長弓寺である。国絵図によると、西岸のやや南が二名村である。二万分の一図では橋からおおむね直線的に道が西に延び、白谷から南下する南北の道に合流する。現在でもこの道は白庭台東方の南北の道（生駒市道2号線 けやき通り）にとりつく。

清滝街道と

かえで通り

（太線は古道を踏襲する

と思われる部分）



2 鳥見の白庭山・白庭台

生駒市白庭台は1988年頃から開発が行われた。2006年に近鉄けいはんな線が開通し、近隣に白庭台駅が設置され、利便性は高まった。「白庭台」の地名の由来は『古事記』『日本書紀』にみえる物部氏の祖饒速日命の説話にある。『古事記』『日本書紀』ともに、饒速日命が天から降臨したことを

ものがたるが、降臨した場所の記述はない。『先代旧事本紀』天神本紀に次のようにある。

正哉吾勝々速日天押穗耳尊

天照太神詔して日はく、豊葦原の千秋長五百秋長の瑞穂国は、吾が御子正哉耳勝々速日天押穗耳尊の知らす可き国なりと、言寄さし詔りごち賜ひて天降りしたまふ時、高皇産靈尊の児思兼神の妹万幡豊秋津師姫**栲**幡千々姫命を妃と為て、天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊を誕生の時、正哉吾勝々速日天押穗耳尊奏して日はく、僕降らんと欲ひて装束ふ間に、生れし児あり。此を以て降したまふ可しと。詔して之を許したまふ。――饒速日尊、天神の御祖の詔を稟け、天磐船に乗りて、河内国の河上の**哮**峰に天降り坐し、即ち大倭国の鳥見の白庭山に遷り坐す。謂はゆる天磐船に乗りて、大虚空を翔り行き、是の郷に巡りみて、天降り坐す。即ち虚空見日本国と謂うは是れなり。

饒速日尊の降臨に関係した地名として「鳥見の白庭山」が見える。磐船神社（大阪府交野市私市）に、饒速日命が降臨した際に用いたと伝わる磐船が存在し、白庭台の西が「白谷」の集落である。このあたりの事情により、白庭台の地名が誕生したと思われる。

3 鷺邑

現在、富雄川東岸、西村橋の南に鷺邑に関連する碑などが存在する。碑は神武天皇聖蹟の碑で、次のような文章が刻まれている。

表面

神武天皇聖蹟鷺邑顕彰碑

裏面

神武天皇戊午年十二月皇軍を率キテ

長髓彦ノ軍ヲ御討伐アラセラレタリ

時ニ金鷺ノ瑞ヲ得サセ給ヒシニ因リ

時人其ノ邑ヲ鷺邑ト称セリ聖蹟ハ此

ノ地方ナルヘシ

右側面

昭和十五年十一月 紀元二千六百年奉祝会

昭和15年(1940)の紀元2600年にあたり政府の手で記念事業が行われた。そのうちの一つに神武天皇聖蹟調査および保存があり、当時の文部省が担当して調査が行われた。その結果、18件19か所の聖蹟が決定され、顕彰碑の建立が行われた。この碑はその一つである。

いわゆる神武東征説話の大和へ入る部分は次のような内容である。神日本磐余彦（神武天皇）は河内の白肩津に至り、生駒山を越えようとして、孔舎衛坂で長髓彦の軍勢と戦った、この時、兄五瀬命が負傷するなどしたので、南へ退いた。神日本磐余彦は熊野につき、そこから宇陀に至り、兄猾・弟猾兄弟の兄猾を滅ぼし、国見丘に八十梟帥を討ち、兄磯城・弟磯城兄弟の兄磯城を滅ぼした。その後、再び長髓彦と戦い、長髓彦は滅亡した。神日本磐余彦は即位した。神話としてよく知られる金鵄の物語は『日本書紀』にのみあり、最後の長髓彦との戦いの時に、金色の霊鵄が神武の弓にとまり輝いたので、長髓彦の軍はまぶしくて目も開けられず、長髓彦はついに降伏したとするストーリーである。「長髓は是邑のもとの名なり 因りて亦以ちて人の名とす 皇軍の鵄の瑞を得るにいたり 時人 仍りて鵄邑と号く 今し鳥見というは是 訛れるなり」（長髓はもとの村の名である 皇軍が金鵄の祥瑞を得たので、時の人はこの地を鵄邑と名付けた 今、鳥見というのはなまったのである）と、地名の鵄の起源が語られる。

碑からやや上っていくと、天忍穗耳を祭る祠が存在する。二万分の一図にもここに神社の記号があり、これに該当するのではないかと思われる。天忍穗耳命（正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊）は天照大神と素戔鳴尊の誓約で生まれた五子のひとりで、高皇産靈神の娘である栲幡千千姫命との間に瓊瓊杵尊をもうけた。瓊瓊杵尊は高千穂峰に天下った神で（天孫降臨神話）、神武天皇はその子孫である。

4 長弓寺

真言律宗の寺院。本尊は木造十一面観音（重要文化財 平安後期）。創建に関して、天平期に、聖武天皇の発願により行基が創建した、同じく聖武天皇が橘諸兄に詔して創建した、行基関わった、天平期に藤原良継が鳥見山で狩猟を行い観音の靈験を得て創建し、真弓で十一面観音像をつくり、長谷寺の観音の余材で観音像を造立して安置したといった、伝承がある。現在、本堂（国宝）・観音堂・牛頭天王社・塔頭四坊などが並んでいる。本堂の棟木に墨書があり、弘安二年の建立であることがわかる。鎌倉中期の貴重な遺構である。

5 円證寺

大和の戦国大名筒井氏ゆかりの寺院。もとは奈良市林小路町に存在したが、1985年に現在の生駒市上町に移転した。平安時代の創建と伝え、元来、筒井氏の本拠地筒井（現大和郡山市）に存在したとの伝承があるが、詳しい歴史については定かでない。筒井氏は林小路にも館を持ち、筒井順昭が

天文19年（1550年）がそこで死去した後、夫人が館を寺に改めたという。
重要文化財の室町時代建立の本堂と筒井順昭の供養塔（石造五輪塔）も林
小路から現在の所在地に移建された

6 杵築神社

『富雄町史』に次のようにある

杵築神社 大字二名 境内坪数一二六〇坪

祭神 素戔鳴尊・大国主命・市杵島姫命 例祭 十月十三日

由緒沿革 敏達天皇の皇子春日皇子が己が祖神をこの地に鎮祭せしに創
まるという（宮司谷垣義雄）

現在の説明板によると、もとは午頭天王と称し、主神として素戔鳴尊、相
殿として天忍穗耳命・大国主命・市杵島姫命を祭る。参道の常夜灯には文
政一四の年紀が記される。また、杵築神社のやや北の西岸に地蔵の小さな
祠がある。

図版



図版1 富雄川と清滝街道（南から）



図版2.3 もとの清滝街道



図版4 交差点付近の祭祀施設



図版5 かえで通りと水路



図版6 白谷バス停付近



図版7 けいはんな線



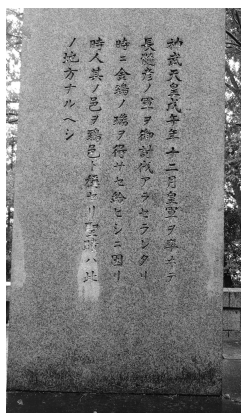
図版8 真弓橋



図版9. 10 長弓寺参道



(西から 先に鳥居が見える)



図版11. 12 神武天皇聖蹟鶏彰碑

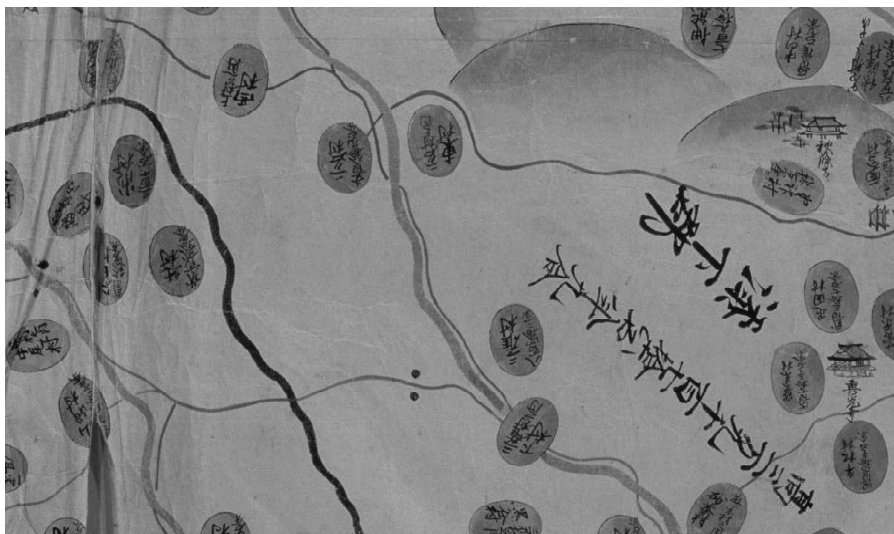


図版13 天忍穂耳神社

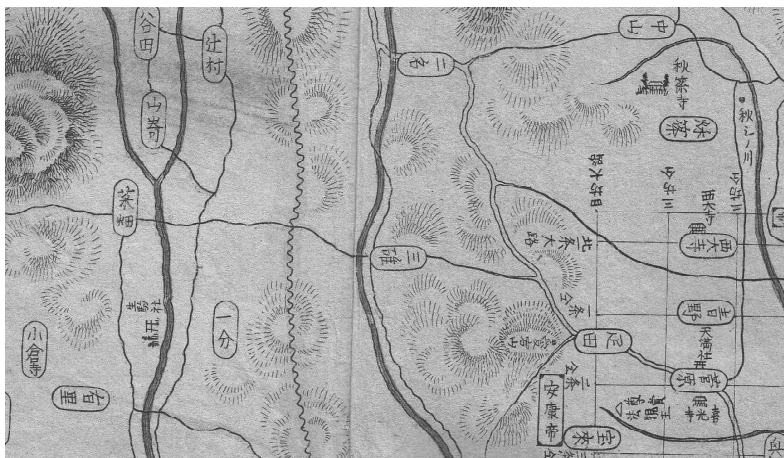


図版14 杵築神社

【二名・三碓】



元禄村絵図



大和全国地図

1 古道の概要

二名周辺

国絵図では、富雄川西岸の二名村の表記（現三松付近）から川を渡り（現月見橋）、東村からさらに東に延び、神野村や西大寺を通過する道が存在する。大和全国地図では、川の東岸（国絵図の東村にあたる地点）に二名村の表記があり、そこから東につながる2本の道が描かれる。北の道は中山に至り、南の道は南東に斜行しながら（A）、途中で西大寺近辺（B）につながる道を分岐し、疋田村（C）に至る。国絵図の道は大和全国地図のA－Bのルートに当たるのであろうが、大和全国地図でより太く描かれるのはA－Cルートのほうである。二万分の一図でも、この2本の道は存在する。

南の道は大和全国地図と比較してはるかに斜行の角度は浅いが、直線的に疋田村までつながる。途中でこのあたりでは大きなため池である蛙股池の北を通り、そのあたりで西大寺に向かう道を分岐する。これが大和全国地図のA－Bルートである。2本の道の分岐点に存在するのが法融寺である。

杵築神社の南、春日橋付近の西岸に王竜寺にかかわる道標がある。このあたりの西方に王竜寺がある。

三碓周辺

国絵図では、富雄川沿いの道は二名村の南で渡河して東岸に出る。大和全国地図でもやはりこのあたりで渡河する。二万分の一図でも三松の集落の南に橋が確認できる。その南に当たるが三碓村である。国絵図では、下村（三碓村の内）のあたりで、川沿いの道から分岐して西方へ延びる道が描かれる。大和全国地図では、状況が異なり、この道は川沿いの道から分岐するのではなく、東方から延びてきて、三碓村で川沿いの道と交差する。東では疋田村の北で上記のA-Cルートから分岐する。二万分の一図は大和全国地図に近いが、くいちがいもある。疋田村からほぼ直線的に西方に延びる道がある。二名・疋田を結ぶ道から分岐するのではない。なお、二万分の一図では、富雄川以西の部分に古堤街道の名称が見える。川沿いの道と古堤街道の交差点付近に添御県坐神社が存在する。道沿いに神社名を示す石柱があるが、側面には「奉献 紀元二千六百年」の文字が刻まれており、紀元二六〇〇年奉祝の一環として制作されたことがわかる。

2 法融寺

『富雄町史』に次のようにある。

法融寺 融通念仏宗 薬教山 大字二名 境内坪数七二九坪

本尊 木造阿弥陀如来坐像 高サ一尺四寸

由緒沿革 創建年代不詳。寛文五年法融寺となる。中興の開基は学園和尚。融通念仏宗の大通上人がこの地方に念仏勧進以来、融通念仏宗となって今日に至る。(住職金森良誠)

(次に延享3年2月文書を採録)

3 王竜寺

『富雄町史』に次のようにある。

王竜寺 黄檗宗 海滝山 大字二名 境内坪数三二二〇坪

本尊 石造十一面観世音菩薩立像 高サ五尺七寸 蓮台高七寸五分

由緒沿革 聖武天皇勅願の創立と縁起にいう。のち、江戸時代、郡山の城主本田忠平がその古霊場であることを知り、亡父忠義の菩提のためこれを再興、黄檗二代木庵和尚の法嗣梅谷和尚を請じて開山とした。時に元禄二年十二月のことであった。(住職飯野純道)

(次に元禄7年9月本田忠平寄進状・寛延2年12月口上書の2文書を採録)

春日橋西岸の道標 銘文

天下一岩窟大黒天のある

左 海滝寺王竜寺

4 添御県坐神社

『富雄町史』に次のようにある。

添御県坐神社 大字三碓 境内坪数三〇〇〇坪

祭神 武乳速命・速須佐男命・櫛稻田姫命 例祭十月十三日

由緒沿革 式内大社と伝う。午頭天王社ともいわれた。本殿は重要文化財。室町時代の建造物で、覆屋を保つ（宮司奥村市蔵）

倭六県（六御県）とは、古代の大和国にあった大王家の所領である。添御県・山辺県・磯城県・十市県・高市県・葛城県の6か所。645年に大化改新の最初の段階で、東国とともに使者が派遣され、造籍・校田が行われたことで知られる。なお、添御県坐神社は奈良市歌姫町にもある。

5 葛上神社と靈山寺

葛上神社について、『富雄町史』に次のようにある。

葛上神社 大字中 境内坪数六二五坪

祭神 健速須佐男命・天照大神・大山咋神・三箇男神

由緒沿革 脇寺及び山ノ上を除く大字の鎮守。葛上は九頭神にして水神
(宮司吉崎彦徳)

国絵図に靈山寺の記載がある。堂の絵が書かれ、「靈山寺」の文字注記が付される。『富雄町史』に次のようにある。

靈山寺 真言宗大本山 鼻高山 大字中 境内坪数四〇八九坪 奥之院飛地境内六七六坪

本尊 薬師如来坐像 高サ二尺一寸八分（重要文化財）

由緒沿革

寛文社寺記に「此寺ハ聖武天皇御建立也 開山行基菩薩天竺靈鷲山をかた取ってうつさる寺也 本堂本尊ハ薬師秘仏也 脇士有 観音勢至 十二神共外二天像も有 此寺零落して後 弘安年中再興有し所也」とあり、古くから行基の開基と伝える。奈良朝寺院の遺構であって、鎌倉時代に中

興され、寺勢も栄え、鳥見谷最大の寺院となり、興福寺一乗院門跡に属した。江戸時代には寺領百石、坊舎十四を数える。山号を鼻高山というのは、行基が金の鼻高を埋めたからといい、また鼻高大臣小野富人の遺跡だからとの伝説もある。要は自然信仰の霊場に山寺が建立されたもので、山岳宗教をおび、開けたのはかなり古い。この寺が登美寺であるといえないにしても、それに類するものである。本尊及び白鳳期の磚仏以下多数の仏像・堂塔は重要文化財として指定をうけ、その他、弘安二年の下馬札、文安五年の蛙股、応永十八年・宝徳四年の橘吉重瓦などの文化財や、正嘉二年の鳥見預所下知状以下の文書記録、とくに延宝七年から嘉永五年に至る靈山寺諸事記録は、文献として貴重である。弘安六年十一月四日の本堂上棟札もある。十六所神社は本寺の鎮守である。これらについては追って本寺から靈山寺史が発行される筈であるのでそれに譲る。現存の旧塔中としては東光院・地藏院・観音院がある。近世初頭及び明治初年に寺勢を失ったが、幸いに中興せられ、とくに現在旧国宝堂塔の修理工事を了し（大正三年の三重塔修理に本村出身の大工西本元三郎がその才を認められ、のち古社寺修理技手として活躍するに至った）幾多の堂宇・建物の新修等一山の規模大をなすに至った。寺はまた大霊苑・温泉旅館等も経営する。〔住職東山円教〕

（次に慶長7年8月6日徳川家康寄進状・弘安7年11月28日棟札を採録）

図版



図版15 二名から南東への道



図版16 蛙股池



図版17 王竜寺の道標



図版18 添御県坐神社付近（南から）



図版19 上島見橋と富雄川



図版20 古堤街道と阪奈道路（西から）



図版21. 22 添御県坐神社

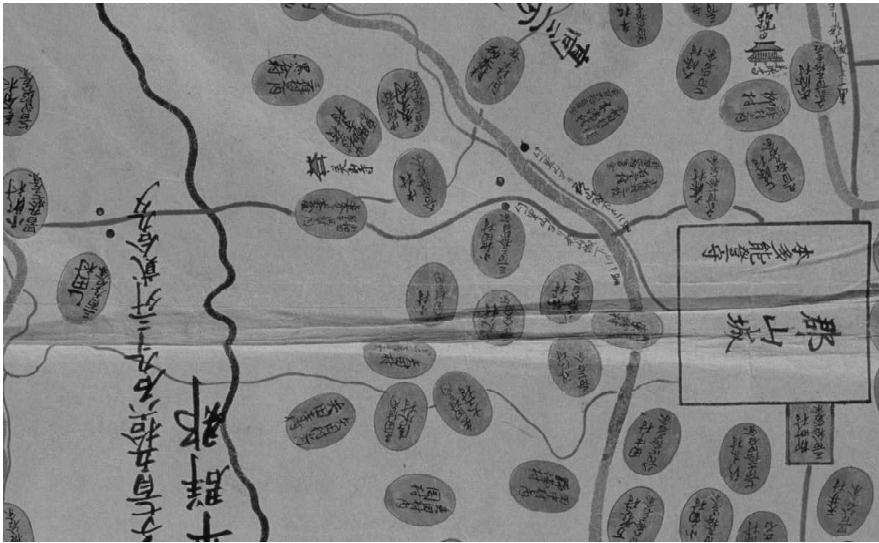


図版23 富雄川沿いの水路

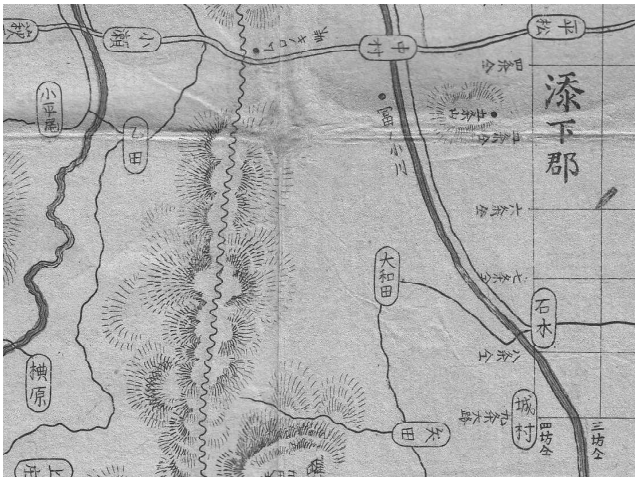


図版24 葛上神社

【暗峠越の街道】



元禄村絵図



大和全国地図

1 古道の概要

国絵図では、藤木村は富雄川の西岸で、川沿いの道はそのあたりで渡河して西岸に出る。そして、いわゆる暗峠越の街道と交差する。暗峠越の街道は西方では中村をへて、平群郡の小瀬村に入り、暗峠を越える。

河内国との国境について次のような記載がある

藤尾村ヨリ峠茶屋河内領迄貳拾町五拾間余

大和全国地図では、川沿いの道は三碓村あたりから石木村までずっと東岸にある。また、暗峠越の街道は平松村・中村・(ムロノキ峠)・小瀬村・萩原村・藤尾村を通るほぼ直線的な道として描かれ、国境には次のような記載がある。

俗ニ暗（ふりがな クラガリ）越ト云ウ 棕嶺越（ふりがな クラカ子）
越大坂街道 河内豊浦村へ続

暗峠越の街道は下鳥見橋で富雄川を渡る。橋の東側に地藏の祠がある。さらに下鳥見橋のやや南を第二阪奈道路が通る（高架）。第二阪奈道路の南に富雄丸山古墳がある。

国絵図では、川沿いの道は暗峠越の街道との交差点の南で再び、渡河して郡山城に向かう。その途中で九条村－石堂村（渡河）－小和田村と伸びる道と交差する。この東西方向の道は暗峠越の街道よりも太く描かれる。

そして、中村・小和田村の西方ではこの二本の道は合流する。そこが追分である。「小和田 脇寺村 西村ノ内 追分ノ茶屋」の記述がある。郡山城あたりより南には富雄川に沿う道の記載は兩岸ともない。大和全国地図でも九条村から大和田村へ至る道は描かれるが、大和田から先の道はない。また、富雄川の東岸を南下してきた川沿いの道は石木村で九条村－小和田村の道に合流し、それより南では、兩岸のいずれにも道の記載がない。

この道に沿って石木村（大和全国地図）があり、道標がある。

- ・（表）（破損あり）みの堂京ばし 道
左くらがり峠玉造
- ・（裏）干時嘉永三庚戌正月吉辰建

嘉永3年は1850年である。

2 富雄丸山古墳

富雄丸山古墳は、1972年の発掘調査で墳頂部に粘土槨の埋葬施設をもつ大型円墳であることが判明していたが、奈良市教育委員会が2017年度に航空レーザ測量（第1次調査）、翌年度に発掘調査（第2次調査）を行い、直径109mの日本最大の円墳であることが判明した。『富雄町史』によると、「河上の墓」「河上陵」の名称をもち、桓武天皇の後（淳和天皇の母）藤原旅子の墓であるとの伝承があった。

3 登弥神社

『富雄町史』に次のようにある。

登弥神社 大字石木 境内坪数五一八一坪 例祭十月九日

祭神 （東）高皇産霊神・誉田別命 （西）神皇産霊神・登美建速日命
・天児屋根命（宮司奥西惣次郎）

由緒沿革 木嶋明神と通称される。本社を式内社登弥神社とするのは大和志である。木嶋・石堂・小和田・大向・城・西城六ヶ村の郷鎮守として栄えた。

（次に天文8年文書など史料を採録）

正面の常夜灯には「木嶋大明神」の銘があり、神社銘を記した石柱の側面には「枢密顧問官海軍大将男爵鈴木貫太郎謹書」とあり、鈴木貫太郎の書であることが確認される。なお、境内の碑（1975年）によると、『富雄町史』の記載「登美建速日命」は「登美饒速日命」の誤りのようである。

図版



図版25 暗峠遠景



図版26 下鳥見橋



図版27 下鳥見橋付近の地藏



図版28. 29 下鳥見橋から西方



図版30 第二阪奈道路



図版31.32 石木の道標



図版33 登弥神社

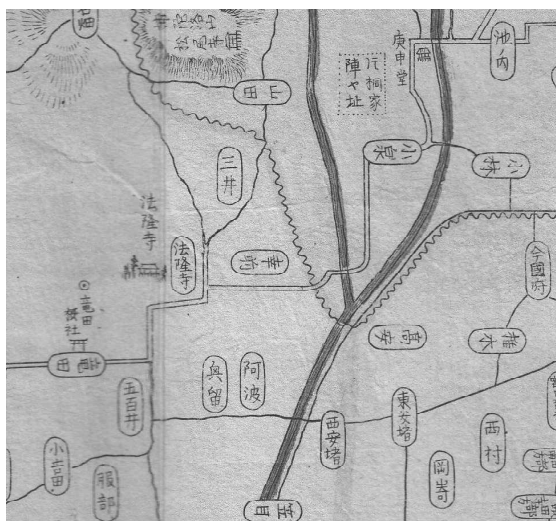


図版34 石柱の側面

【小泉および以南】



元禄村絵図



大和全国地図

1 古道の概要

国絵図には郡山城下から富雄川を渡り外川村を経て矢田寺村へ向かう道が描かれる。これは大和全国地図でも同じである、大和全国地図では矢田寺が記載され、参道としての性格がより明確である。富雄川の西岸のこの道沿いに地藏を祭る祠が存在する。

国絵図では、外川村より南の添上郡域には道に関する記載がなく、平群郡にはいった西椎木村・椎木村・今国府村の北側で、東西に延びる道が描かれ、それが富雄川をわたり、法隆寺方面に向かう。また、それから分岐して富雄川の東岸を南下する道が描かれ、それは大和川を渡り広瀬神社に至る。広瀬神社の北が御幸瀬の渡しで、「御幸ヶ瀬舟渡水幅拾四間」の記述がある。広瀬神社も社が描かれる（広瀬大明神）。東西の道はいわゆる北の横大路で東方は直線的に櫟本まで通じる。西は竜田越に接続する。大和全国地図ではこの記載は国絵図と異なり詳細である。池ノ内村を東西に通る比較的大きな道が富雄川を渡り、南に折れて、小泉村へ向かう。そこからさらに南下し、東に折れて、幸前村を通り、法隆寺に至る。富雄川を渡った所に存在するのが小泉庚申堂である。先に述べた北の横大路は大和全国地図では富雄川を渡らずにそのまま東岸を南下し、大和川を渡る。

二万分の一図では、外川村以南でも富雄川の両岸にともに道が存在し、

池ノ内村の西方で東西の道と交差し、東岸の道はそのまま南下し、北の横大路と合流し、さらに南に延びる。また、西岸に逆L字形に広がるのが小泉の集落である。小泉の集落から南下し、幸前・法隆寺に至る道がある（奈良街道の記載あり）。このあたりの状況は大和全国地図と同じである。

現在、外川村あたりから南は奈良自転車道となっている。この自転車道は慈光院付近で西に向かい、富雄川から離れるが、同じ地点は飛鳥葛城自転車道の始まりでもある。こちらの自転車道は富雄川に沿って広瀬神社を経て、さらに曽我川沿いに延びる。

小泉の北で富雄川をはさむように、九頭上池（東）と慈光院・慈光院蓮池（西）がある。蓮池に接するように、「矢田山地蔵大菩薩」と刻まれた石柱・伊勢神宮の常夜灯・忠魂碑がある。その南方に東から小泉に向かう小泉橋がある。東岸には祠（市場の楠地蔵）、西岸にも祭祀場所（稲荷）が存在する。また、集落の端には伊勢神宮の常夜灯がある。高安村の北で芦川が富雄川に流れ込む。その付近に祠がある。このあたりも自転車道の一部である。さらに南下すると上宮遺跡公園がある。その南でJR大和路線が富雄川を渡る。笠目村付近に伊勢神宮の常夜灯がある。富雄川は笠目村の南で大和川に流れ込む。そのあたりが川合浜で、大和川南岸に広瀬神社がある。

2 慈光院

臨濟宗大徳寺派。慈光院は寛文3年(1663)、この地の大名であった片桐貞昌（石州）が大徳寺の玉舟宗璫を開山に迎え、父貞隆の菩提寺として建立した寺院である。石州は茶人として名を残し、慈光院も境内全体が一つの茶席の風情になるように考えられており、人を招く場合に必要の一揃えが石州の総合的な演出のままに残されている。茶室・書院は重要文化財。

（同院パンフレットより）

3 金輪院（小泉の庚申堂）

天台宗。本尊は大青面金剛夜叉尊。小泉藩主片桐貞昌の家臣で茶人の藤林宗源が創建。片桐氏の安全を祈願させた。本尊の大青面金剛絵像は鎌倉時代に描かれた秘仏で、六〇年毎の庚申の年に開扉される。五穀豊穰の神として農民に信仰され、初庚申には大般若経の転読がある。

3 上宮遺跡

飛鳥・奈良時代の宮殿跡と推定される遺跡。飛鳥時代の遺構は井戸・溝など。奈良時代の掘立柱建物群は2時期あり、中心建物は東西7間・南北5間、二面廂の大型建物。出土品は木簡や墨書土器、平城宮跡と同範の瓦など。付近に「上宮」の小字名が残り、南側に成福寺があつて、ここに聖徳太子に関わる飽波葦垣宮の伝承が残っていたことなどから、飽波宮との関連が想定される。『続日本紀』によると、称徳天皇は飽波宮に行幸して法隆寺の奴婢に爵を賜い、また、河内の由義宮に行くためこの地に滞在した。

4 広瀬神社

主神は若宇賀能売命、相殿に櫛玉比売命・穗雷命を祀る。『延喜式』に「広瀬坐和加宇加売命神社」とある。『日本書紀』に天武4年(675)に使を遣わして風神を竜田の立野に、大忌神を広瀬の河曲に祀らせたとする記述がある。本殿は一間社春日造・桧皮葺。祭礼は例祭、お田植神事など。お田植神事は俗に砂かけ祭という。拝殿での杵まき・早苗取り神事後、拝殿前の斎田（砂庭）で田すき・畔作り・田植などの所作が行われるが、所作の間に見物人と田人が砂をかけ合う

図版



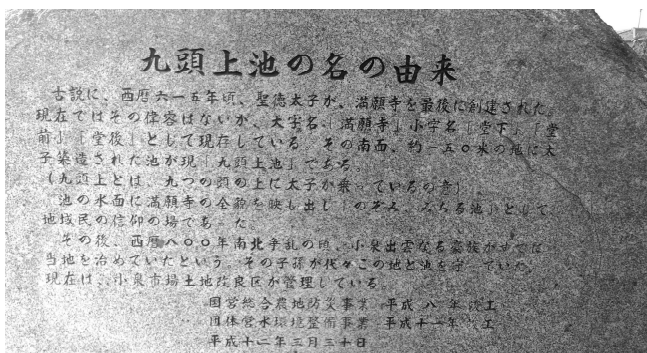
図版35 外川の地蔵



図版36. 37 奈良自転車道

図版38

九頭上池の標識



図版39

九頭上池



図版40

このあたり
の富雄川





図版41 小泉橋



図版42 小泉橋沿いの市場の楠地蔵



図版43 小泉橋の南の祭祀（南から）



図版44 小泉の伊勢神宮の常夜灯



図版45 小泉橋の南の祭祀



図版46 小泉神社



図版47 小泉から南へ向かう道



図版48 小泉庚申堂の南の道

図版49

小泉庚申堂



図版50

小泉庚申堂

(東側の道から)





図版51 富雄川と芦川の合流（奥が富雄川）



図版52 芦川沿いの地蔵



図版53 自転車道の標識



図版54 上宮遺跡公園



図版55 上宮遺跡公園付近の富雄川（工事中）



図版56 笠目の伊勢神宮の常夜灯



図版57 JR大和路線と富雄川



図版58 富雄川と大和川の合流点（手前が富雄川）



図版59

河川管理境界の標識



図版60 富雄川と大和川の合流点（南から）



図版61 広瀬神社



図版62 御幸橋



図版63 西名阪道

私立大学研究ブランディング事業

『帝塚山プラットフォーム』の構築による 学際的『奈良学』研究の推進

奈良県北西部の山・里・川と人々の営みに関する総合的な歴史・文化研究

富雄川流域の古道と歴史

2020年3月31日発行

編集発行 630-8501 奈良市帝塚山7-7-1

帝塚山大学奈良学総合文化研究所

電話 0742-48-8842

印刷 630-8325 奈良市西木辻町139番地6

京阪奈情報教育出版株式会社

電話 0742-94-4567

付記

本ファイルは紙ベースで発行したものの原稿ファイル（PDF）を元として作成した。校正段階での修正を反映し、さらに、紙ベースの書籍における誤りの修正も含む。

（2021年7月1日記）